

日本漢方協会通信

2018 (平成30) 年3月 その1

日本漢方協会は当協会講師の渡辺賢治 (慶應義塾大学教授) の主催する「一般社団法人・漢方産業化推進研究会」に参加しております。1月22日 (月) に三菱総合研究所 (東京・溜池山王) で代表者のセミナーがあり、今井会長が参加しました。その時の内容をお知らせいたします。

議事録

議題: 一般社団法人漢方産業化推進研究会セミナー参加

日時: 平成30年1月22日(月)14:00~16:00

場所: 株式会社三菱総合研究所(東京・溜池山王)

出席者: 今井 淳

1. 開会挨拶

代表理事 渡辺賢治 (慶應義塾大学教授)

2. 参加者

千葉大学渡辺均先生、環境省鳥居敏男、環境省矢野靖明、信越化学工業、グリーン企画、クラシエ製薬、ロート製薬、サントリーホールディングス、ジェネシス(株)、(株)ナイス・パートナーズ、タキザワ漢方廠、富士通、新日本製薬、日新ファルマ、茨城県、群馬県、富山県、奈良県、平田村、光変換光合成促進農法、日本漢方協会 28名

3. 講演「薬用植物の栽培と出口」

千葉大学環境健康フィールド科学センター

渡辺 均 先生

千葉大学環境健康フィールド科学センターでは発足以来15年植物(園芸)と人間(医学・薬学)の専門家の結集により横断型の学問領域の構築を進めている。医・薬学の専門家や消費者が真に求める健康に資する植物を安全でかつ経済的にどのように供給すればよいかを考慮しつつ、経済品目として成立させる方策を検討している。医薬の専門家や消費者、社会のニーズに的確に応え、薬用植物を健康機能性植物として捉え、その価値を高めるための幅広い植物の知識提供と経済性・実効性を加味した高度な栽培技術を提案する。

(1) 健康機能性植物とは。

人々の健康に何らかのプラスの影響を与える植物を意味する、

(2) 薬用作物生産の背景

現在、生薬医原料は、国内で全量を充足することは困難である。日本の生薬生産農家の高齢化、原料買い取り価格の低迷などによる離農・転作者の増加などにより、国内生産量は急激に減少している。漢方薬の原料である生薬の国内自給率は金額ベースで13%程度、約80%を中国からの輸入に依存している。しかし、江戸時代にはオタネニンジン、シャクヤク、トウキ、ボタンなどの栽培が奨励され、一部は

現存する島根、長野、会津のオタネニンジンはその際に形成された産地である。1950年~60年代には、国内各地で生薬原料の栽培が盛んに行われていた。

日本が長年にわたり蓄積してきた高度な園芸生産技術を薬用植物生産に応用し、環境保全的かつ省資源的な生産体系を構築するための技術開発が急務である。さらに国際競争力を有する産業に転換するためには、栽培適地の選定、生産性や付加価値の高い生産技術の導入、優良名品種、系統の育生、加工・保蔵技術・流通技術の導入も望まれる。

当センターでは、医学(漢方医学)薬学(生薬資源)、園芸学(育種、栽培)を専門とする教員及び技術職員と民間企業が連携し、採算性を考慮した実用可能な薬用植物の栽培研究を進めている。

(3) 薬用栽培における問題点

- ①種苗の入手が困難
- ②品種や系統が不明確
- ③採取技術が未熟
- ④栽培期間が長い
- ⑤登録の農薬が少ない
- ⑥日本薬局方と薬価 など他の農作物とは異なる薬用植物特有の課題が存在する。

(4) 健康機能性植物(薬用作物)の高品質化、栽培効率のために必要な解決すべき課題

- ①在来品種、在来系統の収集と維持(系統技術管理)
- ②遺伝子レベルでの品種、系統判別技術の確立
- ③採種技術の改善
- ④種子の発芽技術の解明
- ⑤種子の発芽特性の解明
- ⑥休眠条件(休眠打破・休眠導入)の解明
- ⑦光合成特性の解明
- ⑧栄養繁殖技術の効率化
- ⑨生産期間の短縮
- ⑩高品質・高収量化・省力化技術の開発
- ⑪多面的利用
- ⑫最適栽培地の遺唐と選定

(5) 事業化・産業化の方向性

- ①少ない地域間競争
- ②生產品目の選択肢が多い
- ③新たなモデルの構築

(6) 栽培研究

- ①キハダの育苗
- ②トウキの栽培研究
- ③オタネニンジン生産の問題点
- ④オケラの生産期間の短縮
- ⑤オケラの山菜・軟白野菜の販売、和食の試作(京都祇園)
- ⑦オオナルキュリの山菜
- ⑧カラスビシャク(半夏)の育成
- ⑨ケイガイ(荊芥)の生産試験
- ⑩中国薬の国産化(半枝蓮・白花蛇舌草)

日本漢方協会通信

2018 (平成30) 年3月 そのII

五色不動尊詣り 活動記録

1. 目的 漢方基礎理論の五行説中の五色 (青赤黄白黒) に関連する
五色不動尊詣で行い、その学習と散策を通じて、参加者の懇親を計る。

1. 実施日時 2018. 2. 12 (月・祝日) 12時～20時前後

1. 集合場所 東急世田谷線・三軒茶屋駅乗場前

1. 参加者 石井由樹子・岡崎仁子・小根山隆祥・河合元宏・岸本直子・小林信恵
杉山正明・高山留美・飛名良治・松下直美 (目黒で解散)・三上順子
三田学 (目黒で解散)・三室洋・三室朋子 (敬称略・五十音順) 14名

1. 訪問コース (相生通りにお詣りしないとご利益がないとの事と最上位が青との
考えから三軒茶屋目青不動をスタート地点とし、以下の順とした)

三軒茶屋・目青不動 (教学院) →

↓

本駒込・目赤不動 (南谷寺)

↓

三ノ輪・目黄不動 (永久寺)

(もう一つの目黄不動と言われる平井・最勝寺はカット)

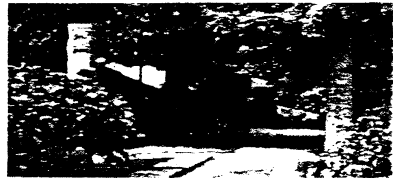
↓
高田・目白不動 (金乗院)

↓

下目黒・目黒不動詣り (瀧泉寺) →

↓

森下・懇親会場 (桜鍋・みの家)



1. 参考 *五色不動は、寛永年間の中旬、3代将軍徳川家光が大僧正天海の具申をうけ江戸の鎮護と天下泰平を祈願して、江戸市中の周囲5つの方角の不動尊を選び割り当てたとされる。五色とは陰陽五行説に由来し、青・白・赤・黒・黄で、それぞれ五色は東・西・南・北・中央の方角を表している。
- *京都の五色不動は、青蓮院の青不動を中心とした同様の五色不動の伝説があり、その歴史は古く、平安遷都後に朝廷が都を守るために四神と合わせた五色の守りとして不動明王を配置したとされる。その後2つが失われ、現存するのは遍照寺の赤不動、曼殊院の黄不動、そして青蓮院の青不動だという。青蓮院では青を五色の中心と位置付けており、最上位に君臨するとしている
1. その他 *6時間30分、2万歩の散策会であったが、各不動尊詣でをしながらであり、心地よい疲労感であった。
- *懇親会では、桜鍋、あぶらさし (たてがみ部分)、たたきなどを賞味しながら参加者一同、懇親を行った。有意義な一日であった。

杉山 正明